

---

# 【ラノベホラー】彼のポスター

たいらひろし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【ラノベホラー】彼のポスター

### 【NZコード】

NZ429N

### 【作者名】

たいらひろし

### 【あらすじ】

ライトノベルホラー。某新人賞の一次選考まで勝ち上がったお話です。pixivに掲載している小説を転載しております。

ホラー形式をとっていますが、流血や暴力、グロテスクな表現などは含まれていません。高校の掲示板に張り出されたポスターに『すき』という意味不明の落書きがされた。ポスター製作者の英介は犯人を捕まえようと躍起になるがなぜか見つからず、徐々に犯人の行動がエスカレートしていき……。

## プロローグ

「コンピーン。たつだいまー英介。部屋入るよー。元氣してたー？」

「おう、お帰り姉貴。旅行、どうだった？」

「なかなか楽しかったよー。はいこれ、英介におみやげ。昔の、百  
年くらい前に製造された水彩絵の具だって。こいつの、好きだつ  
たでしょ」

「昔の絵の具？ レアものじゃん。高かつたんじゃないの？」

「そうでもなかつた。たまたま立ち寄つた国立公園で骨董市みたい  
なのが開かれててね、そこで投売りされてたの。貯蔵倉の整理のた  
め、二束三文で売つてますー、とかいつて。どう？ 気にいつく  
れた？」

「……うん、うれしい。すげえうれしい。サンキュー姉貴。……ふ  
ーん。昔の水彩絵の具ねえ」

「あのや。よかつたら、絵のモデルになつてくれねえか？」

早秋の放課後。柿色に染まる静寂の美術室へたまたま忘れ物を取  
りに顔を出した美弥へ、ひとり居残りしていた美術部の英介が決死  
の申し出をした。たつたこれだけ告げるのに三日もかかつてしまつ  
た。以前からお願ひしようと思っていたのだが、なかなかタイミング  
がつかめなかつたのだ。機会はいくらでもあつたというのに。

驚き顔をする美弥に英介が説明する。

「ほり俺、今度さ、掃除強化習慣のポスターを書くことになつてる  
だろ。モチーフをうちの高校の女子にしようと思つてるから、モデ  
ルがいたほうが描きやすいんだ。悪いけど、協力してもらえねえか  
な」

「ああ、なるほどね。かまわないよ」

ふたつ返事で快諾した美弥は、近くの椅子に腰をおろした。

「ああ、ちょい待ち。ポーズがあるんだ。少し足を開きつつ背筋を伸ばして立つ。視線はまっすぐ。それから、左手を腰に。右手は前方、水平に突き出して、人差し指をびしっと上にたてる。アメリカンプロレスラーが「アイアムナンバーワン！」と叫ぶときの格好に似ていた。

苦笑しつつ美弥がきく。

「……なにこの姿勢。どんな意味があるの？」

「掃除をサボるなつて叱つてるポーズ。んじゃ、さつそく始めるか」使い古したパレットと水入れ、そして古風なチューブに詰まつた水彩絵の具をセットした英介がイーゼルに向かい、美弥が指示されたとおりのポーズをとり、ふたりだけの時間が訪れた。

絵筆を握った瞬間、英介の心からあらゆる雑念が消えうせた。英介の瞳がここではない遠くを見つめ、絵筆の先が画用紙上を踊る。剣道部で鍛えられた足腰の賜物か、美弥は一度も休憩をはさまずに立っていた。

一時間は一瞬だった。窓の外はどうに紫色と闇色ばかりだ。

白い蛍光灯のした、英介が筆を置いたことで立ちっぱなし終了を悟つたのか、軽く伸びをした美弥がさつそくイーゼルを覗きこみ、

「あれ？ 全然、あたしに似てないじゃない。なんですよ？」

嫌味でも不平不満でもない、澄んだ疑問をのせた声で、英介に笑いかけた。

たしかに、彼女のいうとおりだった。

美弥は胸まで届く黒髪、輪郭が細く、引き締まつた口元や眼鏡ごしの切れ長の瞳が知的な印象を与える、一言で表現するならばキッネに似た面立ちだ。

対し、ポスターに描かれた少女は肩までしかない茶髪、ふっくらした輪郭に脱力気味の口元。たれ目がなんだか泣き虫そうな感じだ。眼鏡すらかけていない。これでは、さながらタヌキだ。

キツネ美弥とポスターのタヌキ少女。類似点といえば背格好くら

いなものである。

英介が頭をかきながら、

「だつてさ、校内に張り出す風紀ポスターだぜ」

「あ……ああ、そうか。あたしと顔がそつくりだつたら、おかしいもんね」

「そういうこと……悪かつたな。一時間もぶつ通しで立たせちゃつて」

「いいよ。きみこそ大変だつたね。お疲れさん、英介」

気軽に田の前の男子生徒の名を呼び捨てにし、美弥はポスターを眺めてにこにこと囁じりを緩めた。

まんざらでもなさそうな彼女を見て、英介は満足する。  
好きな相手に似せて描くことができなかつたけれど、でも、充実した時間を過ぎさせたと思つ。

風紀ポスターのモデルは、口実に過ぎなかつた。

英介は、美弥の肖像を描きたかつた。

自分の宝物である絵の具を、彼女のために使いたかつたのである。

そのときからすでに、英介は、見られていたのだ。

## プロローグ（後書き）

作者のたこらひろしと申します m( )m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ(・・)【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

## 01 ポスターの落書き

『すき』

「……なんだこりや」

ほかに通行者のいない昼休みの廊下で、掲示板に張り出してあつたポスターのいたずら書きを見つめながら、英介は憮然とつぶやいた。

そのポスターは彼が先生に頼まれて製作を手がけた、美弥をモチルにして全身全霊を注いだ作品である。

いたずら書きを発見した瞬間、英介の心に黒い感情がぶくりと湧いた。

英介は子供のころから絵を描くのが好きだった。継続は力なり。六歳くらいから十年間ひたすらに鉛筆と絵筆を走らせていた結果、こと美術方面において秋月高校で彼の右にいるものは三学年生徒先生ひつくるめて皆無である。ゆえに、つい先月。その手腕をみこまれて、学年主任の嵐山先生から『掃除強化週間』のポスター製作を頼まれたのだ。

英介は素直に嬉しかった。クラスメイトから「似顔絵描いて」とせがまるるのは重みが違う、正に自分の価値を認められたんだ、という気がした。

なのに、この落書きはなんだ。

たしかにこの作品は学校から依頼されたポスターなのだから、お色気や面白みとは無縁だ。タヌキ顔の少女が人差し指立てて怒っているポスターなど、ドラマに出てくる通行人Aみたく、まるつきり目立たないものだ。はつきりといってここを通るひとに存在を認知されているかどうかも怪しい。もちろん、だからといってそれがいたずらをしていい理由にはならない。

英介は落書きを凝視した。文字にも個性があり、筆跡を見れば書き手が男か女か、几帳面なやつかおおざっぱか、何歳ぐらいなのか

がわかる。ひょっとしたら、犯人割り出しの手がかりになるかもしない。

。 そのふたつの丸文字は、鉛筆らしきもので書かれていた。『すき』

すき。…………好き、か？

英介の腹の虫が暴れだした。丸っこい筆跡からして十中八九、書いたのは女だろう。なにが、すき、だ。ひとの力作をラブレター代わりにしないでほしい。だからだれへ宛てたメッセージなのかもわからないし薄気味が悪いし、第一、作者に失礼だ。

英介は鞄から消しゴムと引っ張り出し、傷がつかないよう丁寧にポスターを『ごじご』したあと、ポケットから取り出したメモ帳をちぎつてポスターのそばに添えた。

『いたずら書きはやめてください』

シンプル・イズ・ベスト。とりあえずはこれでいいだろ？

怒れる腹の虫をなだめながら、英介は教室へと戻った。

翌日の昼休み。人影のない廊下のポスター前にて、英介はこめかみをひくつかせていた。

『おへんじくれて、ありがとう  
ずっとあなたがすきだったの』

腹の虫が再び、わいのわいのと疼いてきた。

きのう落書きを消したと思ったたら、翌日にこれだ。この落書き犯、ひとの誇りを十足で踏んづけることに気づいてない。これではポスターがかわいそうだ。ただでさえ泣き虫そうなタヌキ面の女子生徒のイラストが、ますます泣いているような気がした。つーかなんだ、この『おへんじくれて、ありがとう』ってのは。やつこさん、俺に宛てて書いてたわけか？ あなたって俺のことか？ ……って、んなわけないか。俺が残したメモには『いたずら書きはやめてくだ

さい』としか書いてない。それじゃ、個人を特定するのは無理だ……いや、までまで。俺宛であるうとなかろうと、これ以上俺の作品に妙なことを書かないでほしい。

だれかいたずらの目撃者がいないかと左右を見渡してみると、ひとりこひとり、いやしなかつた。

この廊下は人通りが少なく、落書きしてる最中にだれかが通りかかって「御用だ！」になる可能性は低い。きっと犯人も、人目のないときを狙つて書いたんだろう。

なんてせこくて卑劣な犯人だ。すげえ頭にきた。

英介はシャーペンを握り、ちぎったメモ用紙に書きなぐつた。怒りのままに動く指を止める気はなかつた。

『いたずら書きはやめてほしい。

このポスターは真剣に製作したものだから、落書きをされると本当に腹がたちます。

これつきりにしてください。

ポスターの作者より』

ふう、と一息。少しだけ、落ち着いた。

……なんか、無難な文章になつてしまつた。もっとこう『こんどやつたらお前の を してやる!』とか『落書き犯人へ あなたの家を知つてます。火の気に注意してください』みたいな、犯人がビビッて一度といだつらができなくなるくらいに恐ろしいことを書くつもりだつたのに。自分は肝つ玉が小さいんだろうか。しみつたれたメモ書きを残しつつ、英介は昼飯をたいらげるべく食堂へ向かつた。

さらに翌日の昼休み。

我慢の限界というのは案外、簡単におどしられるものだということを、英介は体感した。

『ごめんね、怒らないで

あなたとお話をしたかつただけなの

えへへ、願いがかなっちゃった

怒った顔もかっこいいね』

「アホかつ」

ポスターの貼られた掲示板をしたたかに殴った英介は、苛立ちを声にのせて吐き出した。

この犯人、やめる気はさらさらないらしい。文通じっこがしたいのなら、そばにメモ帳を残せばいいといつて、どうしてわざわざポスターに書くのだ。

勘弁ならない。いやがらせをやめないんなら、いっちゃんを考えがある。

放課後、美弥に会おう。

五時間目チャイムが、英介とポスターしかいない廊下に響いた。

「ほつといたら？」

同日、放課後。オレンジ色の廊下を、美弥が英介の隣に付き添いながら意見した。

「犯人はね、だれかにかまつてほしいだけなの。相手にしてもらつて喜んでるのよ。ほら、知らない？ ネットの掲示板とかにひとをおちょくるようなことを書きこむやつ。そういう手合は無視するにかぎるわけよ」

凛とした姿勢で歩を進めつつ、訳知り顔で犯人像を特定していく。剣道部所属、かつ風紀委員の彼女はポスター製作の責任者のひとりだ。

英介は絵の作者であるとはいって、現在、あいにくポスターの取り扱いに関しての発言権はない。掃除強化習慣中において、ポスターの所有権は風紀委員にあるからだ。いたずらにポスターを返していく

れと訴えても、ききいれではもらえないだろう。そこで、先生たちのお気に入りである優等生の美弥に後ろ盾を頼もうというわけだ。まったくもつて虎の威を借るキツネだが、このさい手段は選んでいられない。

「あのさ。本当にポスターを回収するつもり？ もつたいなくない？」

「きみ、一生懸命書いてたじやない、あの絵」

ふと歩みを止めた彼女が、眼鏡ごしに英介の瞳をまじまじと見つめてきた。

英介は肩で息をつき、

「ああ、心血を注いで描いた。だから回収するんだよ。大事な作品を他人の落書きなんかで汚されたくない。あれはこの世にひとつしかない、俺の魂だからな」

「あたしは逆だな。いろんなひとの目にとまらないと、もつたいないと思う。たとえけちをつけるひどがいたとしても、それって、注目してくれるつことの裏返しじゃないの」

「違う。けちをつけられたんじやない、作品を汚されたの。製作者の俺が許せないっていってんの。だからポスターをひきあげるんだよ」

「まあ、いいけど。ただしその落書きってのがたいしたことなかつたら、できれば考え方直してほしいな。あれ、あたしが協力したものもあるし」

なんやかんやいつているうちに、ポスターが見えてきた。掲示板の前は相変わらず閑散としており、夕闇に彩られた廊下に人影はない。

証拠として残しておいた落書きをしげしげと見つめながら美弥がつぶやく。

「ふうん。しつかし、ひまな人間つているもんねえ。ポスターにいたず、落書き犯、この近くにいるわ。きみも探して」

唐突に落書き文から顔をそむけた美弥が、剣呑な瞳を周囲に走らせた。

「お、おい、どうしたよ」

怪訝そうに眉をひそめる英介に、油断なく廊下に田を向けながら美弥は黙つて落書き文字を指し示した。

『ごめんね、怒らないで

あなたとお話がしたかつただけなのがえへへ、願いがかなつちゃつた

怒つた顔もかつこいいね

そのひと、だれ？

「……なんだ、こりや」

おなじみになつたセリフを吐きながら、英介は呆然とした。

『そのひと、だれ？』なんて一文、さつきまではなかつた。どうやら、英介が美弥を呼びにいつてゐるあいだに書き加えられたらしい。そのひと、とはだれのことだらう。まさか、美弥のことだらうか。……しかし？ そのひと？ とはいやな書き方だ。まるで、どこからこちらを監視でもしているかのような……。見られてる？ どこから？

凍つたナメクジに背中を這いずり回られるよつた悪寒を覚え、英介は廊下のすみずみに視線を走らせた。

だれも、いない。

「……本当に、近くに、いるのか？」

「多分ね。どうする、捕まえる？」

「できれば、そうだな」

「わかった。きみ、左をお願い」

美弥にいわれるまでもなく、英介は廊下の左側の部屋を片つ端から調べていった。

美術室。

美術準備室。

図工室。

図工準備室。

等間隔に配置された扉はすべて固く閉ざされている。手をかけて

もびくともしない。

英介はいまさらながらに思いだした。放課後、部活動などが特にない特別教室は、生徒を立ち入らせないためにカギがかけられるのだ。つまり、廊下左側の部屋にはいないということか。美弥も右の教室郡を調べつづしたのか、英介に向かつて首を横に振っている。  
……いや、まだ、廊下の突き当たりに、あとひとつだけ調べてない扉があつた。

非常口。

避難訓練のときくらいしか活躍しない、極めて存在感のない扉。開閉される機会があまりに少ないためか、大量の錆がドアのあちこちについている。

本当に開くのか怪しみながら、英介がノブに手をかける。ヤギの断末魔みたいな軋んだ音をたててゆっくりとドアが開いた。

涼やかな風にほほを撫でられた。

ここは一階。眺めがいい。畠と立ち並ぶ家々が、秋の夕空のしたでどてつと寝そべっている。微妙な間隔で点在するビルによつて作られた長い影が、下校中の小学生を食らう魔物かなにかのように見える。

英介が爪先立ちで外の踊り場へ出て、一階と二階へ続く砂利まれの階段を覗いてみるものの、やつぱりだれの姿も確認できない。「無駄足か。つたく、どこにいるってんだ」

「英介えー！ ちょっとこっちー！」

美弥の声。こちらなしか、声に焦りがうかがえる。

英介が早足で廊下へ引き返すと、美弥が瞳を細めながらポスターに書かれた丸文字を指差していた。

『そのひと、だれ？』

英介くんと仲がいいの？』

「ちょ……おいおいちょっと待てよ」

増えてる。また書き足されてる。英介くんと仲がいいの？ なんて部分、さつきまではなかつた。

美弥が英介を振り返つて、

「きみが書いたんじゃないよね」

「……おい、いまのいいかたは力チンときたぞ。どこの世界に自分の作品に落書きする作者が」

「きいてみただけよ。念のためいつとくけど、あたしでもないからね」

「そりや、そだらうナビよ。じゃあ、だれが？ 僕ら以外、ここには……」

「待つて待つて、ちょっと整理してみましょ」

鹿爪らしい面持ちで、美弥が状況を冷静に分析していく。

「落書き犯人を捜すために、あたしたちはほんの少しだけ、ポスターから目を離したよね。ほんの少し。長くて一分くらい。その間にだれかがここにやってきて、ポスターに文を付け足したということになるね」

「だな。……でも、いつのまに、どうやって、書いた？」

そこが不可解な点だった。

目を離したといつても、英介も美弥もここから動いていないに等しい。ふたりの目をかいぐぐつて落書きするなんて、不可能だ。

ふと美弥が、訝しげにきいてきた。

「ねえねえ、ところでさ、？ 英介くん？ ってなに？」

「は？ 僕の名前じやん」

「じゃなくて。なんで落書き犯人、きみを英介くんなんて呼んでるわけ？ ズイぶん親しそうじゃない」

「知らん、つていうか俺が知りたいわ。つたく、気持ち悪いつたらよお」

「まったくねえ。いたずらにしてはしつこいつていうか、手がこんでるつていうか。ひょっとしたらストーカーかもね。ほら、みてみてこれ。『怒った顔もかつこいい』つて。これ書いたひと、きみのこと、よおく觀察してるみたいね」

「気色悪いことこうなよ。それよりこのポスター、片付けようぜ。」

これ以上、ストーカーとの文通の道具に使われるのはたまんねえよ  
「それは同感だけど、先生が許可をくれるとは思えないな。これ一  
応、体面的には風紀委員みんなで製作したものになってるし、掃除  
強化習慣もあと一週間ほどで終了でしょ？ ただのいたずらだ、も  
うすぐ終わるから我慢しろ、つて一笑に付される気がする」

「なんでもいい、とにかく職員室、いこうぜ。悪いけど、先生説得  
のバックアップ、たのむわ」

「ん……ところで、さ」

職員室へ向かおうとした矢先、ふいに美弥が立ち止まり、宣戦布  
告でもするかのように廊下の奥へ向けてきこえよがしに大声をだし  
た。

「犯人、気になるみたいねえ、あたしたちの仲っ  
「は？」

怪訝な顔をする英介の右腕に、突如、美弥がしがみついてきた。  
彼女のふくよかな胸の双丘が英介の二の腕に、むにゅっと押しつけ  
られる。

英介の時が止まった。

呼吸が停止し、足は床に張りつき、視線は廊下の壁を凝視したま  
ま微動だにせず、そんななか、心臓だけが冗談抜きで破裂するかと  
錯覚するほどに高鳴っている。

美弥が餌をねだるネコの「とくさら」に体を摺り寄せてきた。熱し  
た餅のような、ふくよかな弾力。長い黒髪の甘い香りが英介の鼻腔  
をくすぐる。英介の血圧が暴走機関車の「とく上がっていく」のど  
が詰まり、声が出ない。

……おいおい、なんでだ。

「こいつ、なんでこんな真似をするんだ。

こんな場所で、こんなけしからん行為を平然とできる彼女の神経  
を疑うと同時に、二の腕に全神経を集中させている自分の頭を疑つ  
た。「英介、ほら、セリフ。あたしに合わせて」と耳元でささやく  
彼女の言葉など、もちろん英介の脳には届きはしない。

五秒も耐えきれなかつた。

理性が決壊する一歩手前で、英介は美弥の腕を振りほどいた。

「バ、バカッ。離れる、ほら、職員室、いくぞ」

「ちょ、ちゃんと答えなさいっての? ……ああもう」  
むきになつて抗議する美弥を従えて、英介が職員室のドアを開けた。

さて、交渉の結果。美弥のアドバイスどおり、先生からポスター取り外しの許可はおりなかつた。

そのかわり先生の手により、『落書き禁止』という、有効期限切れの福引券並に役にたたない注意書きが、ポスターの隣に張られた。

「ん? あのポスターのこと? きみ、まだ根に持つてるの?」

ジーパンにタンクトップ姿の美弥が、ベッドに寝そべりつつ田を通していた月間雑誌『いまだきの日本刀』から顔をあげて、隣に座る英介へと呆れたような声をだした。

時刻は夜八時。英介の自室。

そう、ここは英介の部屋……なのだが、まるで美弥、ここが自分の部屋であるかのように羽を伸ばしている。英介もそれをいまさらああだこうだと口を出すことはない。

「そりや、がんばって描いた絵にいたずらされたのは腹がたつだろうけど、鉛筆の落書きじゃない。ボールペンを使われたとか、破かれたとか、そういう取り返しのつかないことをされたわけじゃないでしょ」

「たとえばだな」

いまだ制服から着替えていない英介が飲みさしたコーラ缶を机のうえに置いて、

「自分の宝物を赤の他人に壊されたら、どう感じる?」

「そりや……うーん、そういう怒るかな。相手がだれだろうと、た

だじや おかないと思つ

「だろ？ 僕にとっちや、それとおんなじなわけよ」

「ふうん。なるほど、オッケ。きみの気持ちはわかつた」

反動を利用しつつひょいつと起き上がつた美弥が、朗らかな面持ちで提案する。

「じゃ、今度またいたずらがあつたら、先生たちに内緒でポスター回収しちゃおうか」

「？」

「本来なら許されないけど、そこまでいやだつたら、掃除強化習慣の終了前にポスターをはがしちやつてもいいんじゃないの？ あたしはかまわないと思うな。作品にこれまで以上の傷がつけられる可能性があるのは事実だし、あれ、きみの作品だしね」

「つて、はがしたあとポスターはどうするよ」

「ここの部屋に飾つておいたら？ 持ち出しがばれる心配はないでしょ」「うし」

美弥にしては珍しく乱暴なアイデアの端々に、英介は彼女の気遣いを感じた。美弥は、英介の気持ちを尊重してくれているのだろう。たしかに、彼女の言い分にも一考の余地があるかもしれない。美弥の隣にごろりと寝そべつた英介は、ぼんやりと天井を眺めた。

ふと、美弥が不満げな声を漏らした。

「しつかし、なんであるとき、あたしのことと彼女だつて大声でいつてくれなかつたのよ？」

「……は？ なんの話だよ？」

「ストーカー、近くにいたのは間違いないでしょ。だつたら、ここにいるのは俺の彼女だーつ、て大きな声で宣言すれば、『んま。英介くんつてば彼女がいたのね』って感じでストーカーも諦めてくれたかもしないのに」

「あ……そういうつもりであのとき、抱きついてきたのか」

「そ。見せつけてやつたわけ。あたしたちのラブラブっぷりを」

「なんだよ、ラブラブっぷりって」

「細かいことは気にしないの」

「細かいことかね……でもさ、危なくねえの？俺、ストーカー系のドラマなら昔いくつか見たけどさ、それだと大抵、主人公と仲がよかつたり、そばにいるやつから危険にさらされていくんだよな」

「ふ」

眼鏡の奥の切れ長の瞳が不敵に笑つた。むくりとベッドから体を起こすや、「ストーカーなんてこうよ。ジャブ、ジャブジャブ」と口にしながら左手をすばやく前後させる。ひょっとしてシャドーボクシングのつもりだろうか。その様子が妙におかしくて、英介は苦笑を漏らした。この子供じみた行動は、きっと彼女なりの励ましなのだろう。ポスターいたずらに気を揉む英介への元気づけパフォーマンス。

英介はベッドに背をあずけ、大きくあぐびをした。

たしかに、心配しそうかもしれない。現実はドラマじゃない。常識はずれな非常事態など、そうめつたに起こるわけないのだ。

## 01 ポスターの落書き（後書き）

作者のたごりひろしと申します m( )m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからH+チな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ(・・)【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

## 02 ハスカレート

『「めんなさい。英介くんにきらわれたくない。

あなたが字を書いてほしくないのなら、わたしは書きません。

どうか私と文通をつづけてください。

私ただ、あなたが好きなだけなの。

私が悪いんだよね。

英介くん、文字を書かないでつていったのに、私、書いちやつた  
から。きっと、きらつてるよね。

『めんなさい。どうか、きらいにならないで。

これからは、となりのかべに書きます。

私をすてないで。

あああああ。

どうすれば英介くんが怒らないように許してくれるよつに書ける  
のかわからないうよ。

私、どうしたらいいの。

どうしたらいいんだらう。

英介くん。好き。

許してくれますか？

きらわないで。

ひとりにしないで。

好きです』

「…………」

朝一番にポスターの様子を見にきた英介は、その場で石の像にな  
つた。口だけは『おいおいおい』と動いてくれたが、声はかされて  
出なかつた。

またしても落書き。

ポスターそのものに落書きされているわけじゃない。書かれてい  
るのは、隣の白壁だ。そこに、だと つと、いつたい

何十分かけて書いたのか想像がつかないほどの長い文字が。

この犯人、いつたといつ、これを書いたのだろう。

わざわざ朝一番に登校して、書いたのだろうか。

それとも、放課後にひとりで残つて？

あるいは、その両方？

夕焼けに染まる廊下の光景が、英介の脳裏をよぎった。

みんなから忘れられた、だれにも見向きもされないポスターの前に、女子生徒がひとりぼつんと立つている。

首の骨が折れてるんじゃないかつて角度でうつむいてるから、顔がよく見えない。

右手には手垢にまみれ歯形のついた鉛筆。左手には真っ白い消しゴム。

やおら彼女は壁に手を突いて鉛筆を走らせ始めた。

ここはまるでひとの通らない寂れた廊下だから、叩撃される恐怖はない。

ただひたすらに想い人への愛を文字にする。「好きです」「きらわないで」「すてないで」

女子生徒が首をひねる。喉からぼきんと鈍い音がする。

彼女はなにを考えているのだろうか。ひょっとしたら、私の彼への想いはこんなもんじゃない、とか思っているのかもしれない。消しゴムを使い、これまでの告白文を真っ白にしていく彼女。そして。

「好きです」「きらわないで」「すてないで」

まったくおなじ文章を女子生徒は書いては消し、消しては書いて、何十回何百回とおなじ作業を繰り返す。

彼女はこう思つている。ああ、これを見たら彼、なんて感じるだろう。私のこと、もっと好きになってくれるかしら。きらいにならないでいてくれるよね。だつて、こんなに好きなんだもの。

いまにも天に昇りそうな恍惚の笑みを口元に浮かべながら、いつのまにか夕焼けは沈みきつてあたりは真っ暗に、

電気もつけずに女子生徒は丸まつた鉛筆で白い壁に幾度も幾度も思いの丈を書き綴つた彼女はゆらりと移動する。ポスターのある位置から死角となる壁際へ。

そのまま彼女は待ち続けるのだ。いとしの彼がこないか、と。やがて朝がくる。

そして彼がきた。壁の恋文をみて、驚いている。

暖かな瞳で見守る彼女。

いまも、彼の背後から、じつと 。

「またいたずら書き？ つて、うわ、サイコねえ」

のどまで出かかった悲鳴を辛うじて飲みこみ、英介は背後を振り向いた。いつのまにやら、美弥が英介の背後に陣取つていた。

「……つくりしたー。な、なんで、ここにいるんだよ？」

「きみがこっちにくるのが見えたから。にしても、これ

深刻げな面持ちで、美弥がつぶやく。

「今回はポスター 자체に変なことは書かれてないけど、ちょっとまずいなあ。エスカレートしてきてる」

「あ、あんだけ？」

「きみの話では、初めのうちはちよろちよろとした文章だつたんでしょう？ ？すき？とか？かつこいいね？みたいな。でも、ごらんなさいな、これ」

壁のおびただしい落書きをあとでしゃくる美弥。

「慣れも生じてきたんでしょうね。内容も大胆になつて、文量も増えてきてる。ポスターは無傷だけど、もうポスターがどうとか、そういう次元の問題じゃなくなつてきてるっぽいわ」

筆箱から取り出した消しゴムで壁をじじじしていたずら書きを消した彼女は、

「うん、やっぱがしちゃお」

というなり、ポスターの四隅のマグネットをはずし、傷がつかないように丁寧にくるくる巻いて英介に差し出した。

「んじや、英介が保管してね」

「……いきなりだな、おい。つていうか、はがすんなら帰りがけで  
もいいんじゃ」

「意思伝達手段のポスターをはがしちゃえれば、きみといたずら犯人  
との接点はなくなるわけでしょ？ こいつには早いうちがいいの。  
ズルズルいくよりはね。それとも犯人との交換日記、まだ続けたい  
わけ？」

「んなわけねえだろ」

「だつたらいいじゃん。先生にはあたしからうまくいっとくわ。じ  
や、教室に帰るね」

ひらひらと手を振る美弥の背中を呆然と見つめながら、ポスター  
をもてあそぶ英介。

遠く、おなじみのチャイムが始業を告げた。

古臭い机から顔をあげた英介は椅子に座つたままうーん伸びをして、ポスターのタヌキ面の女子生徒とにらめっこした。我知らず、顔がほころぶ。

美弥の言葉どおり、ポスターをはがしたその日から今日までの二  
日間、いたずらはされなかつた。

当然である。原因となつたポスターは、こうして持ち主の部屋に  
飾つてあるのだから。英介の家に泥棒に入りでもしない限り、もう  
手出しきれないのだ。

英介は安堵する。こいつが無事でよかつた。

これは特別な作品だ。勇気を振り絞つて美弥を誘い、すべてを込  
めて描きあげた入魂の一作。もう日の目をみることはなくなつてしまつたけれど、それはそれでしうがない。どこかの無神経に傷をつけられるよりはました。

スズムシの声が閉じられたカーテンの隙間からきこえる。新聞紙  
や画材で汚れきつた自室を一瞥しつつ、英介は気を取り直して机に

向かつた。机上には、大型の画用紙。

いま手がけているのは、市の展覧会に発表するための風景画だ。風景画というのは写生が多い。美しい風景を現場におもむいてじっくり観賞し、そのうえで画用紙にむかって筆を走らせる。細部まで描写するのが風景画の醍醐味といつても過言ではない。ただ英介の場合、モチーフとなっているのが近所の川原だ。あそこなら、下書き程度なら見なくてもかける。実際、今日の学校からの帰路、現場へ寄つて田に焼きつけ、ついでにメモ帳にラフ画スケッチまでしてきたのだ。まあ、実物の風景とは若干の違いはあるにしても、これはあくまで下書き。少々の差異ならば許容範囲内だらう。

英介はうでを鳴らし、先の丸まつた鉛筆を握りしめ、ほんの一秒で視界から画用紙以外を排除した。

英介の指の動きに合わせて筆が紙面を滑る。絶妙な筆圧でもって、白い紙上に川波を走らせていく。空に雲、地には尾花。過ぎゆく時を想い、そよぐ風を見て、揺らぐ匂いを感じ、川原のすべてを白と黒の世界で表現する。

夢中。

無我の境地とまではいかないが、それに近い状態に英介はあつた。  
「英介えーっ。『はんーっ』  
「わあかつたーっ」

階下で叫ぶ姉に生返事をしつつ英介は絵描きを続行した。

英介が手がけているのは秋の光景だ。夕暮れに近い時間帯。太陽が橙色に染まるころをイメージしている。

現場を見なくとも描ける。子供のころから通いつめた景色だ。春の陽光も、夏の夜空も、秋の花々も、冬の雪景色もすべて心のなかにある。

画用紙と絵の具と川原に誓う。きれいに描いてやるからな。英介は絵筆を上下左右に何千往復もさせ、描いて、描いて、気の遠くなるような集中力の元に絵を仕上げていく。

そして、どれくらいの時間が経過しただろう。ズズムシの

声もいつしか鳴りを潜め、代わりにどこかで犬が吠え始めた。

肩がこったので伸びをして、ついでに目覚まし時計を確認する。

夜中の十一時だった。

「めしづー！」

家族を起こさぬよう、英介はなるべく音をたてずに階段を駆け下りた。

あとの祭りだった。

夕食はもはや影もなく、代わりに一枚のメモが置かれていた。

英介は絶望のうめき声をあげた。

『あんまり遅いから作ったソーメンは全部いたいちゃつたぜ。食べべきや自分で茹れことだぜ 怪人姉ちゃん仮面』

## 02 Hスカレー（後書き）

作者のたぐらひろしと申します m( )m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからHチッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ(・・)【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

そして、一日後。英介と美弥は掲示板の前にいる。

美弥が肩をすくめて、

「あのさ……なんでまたポスターがここに戻つてるわけ？」

「……しかたねえじやん。嵐山が戻せ戻せつてしまつこいんだからよ」

「ああ、嵐山先生ね」

そつけなく美弥が応じ、ひたいに手をやつた。どうやら美弥も嵐山先生が苦手らしい。

叱るタヌキ少女のポスターは、再び元の掲示板に張り出されてしまった。

レアメタルより頭が硬い嵐山は、英介たちの言い分を頭からきかず「すぐ戻せ、いますぐ戻せ」と命じてきたのだ。彼にとつてはポスターの安否よりも掃除強化習慣のほうが重要らしい。

と、美弥がはーいと手をあげて、発言の許可を求めた。

「質問があります」

「なんだよ」

「どうしてバカ正直に家から持つてきたわけ。？すみませんあのポスター捨てちゃいました？つていえ、嵐山先生もそれ以上追求してこなかつたんじゃないの？」

「わかつてねえな。もう、ぜんぜんわかつてねえ」

窓外の青空にため息をついてから、英介はびしりと人差し指を天井につきたて、

「こと自分の作品に関して嘘はつかねえ。たとえ方便でも、捨てたなんて口が裂けてもいわねえ。それが俺の信念だ」

「ふうん、立派ねえ。立派だけど、自分の首しめてるよね」

ごく近くで、分厚い壺が叩き割られるようなばかでかい破壊的な音がした。

のんびりした空氣に亀裂が走った。美弥がびくりと体をこわばら

せ、音のした方角へ顔を向けたときには、英介はもつとちらへ走り出していた。

音は廊下の奥からきこえた。向かう先にあるのは、美術室だけだ。まず英介が美術室前に到着し、遅れて美弥がやつてくる。周りにはだれもいない。

だれか飛び出してくるんじゃないか、と身構えながら、英介は引き戸に手をかけ、勢いをつけて開いた。

美術室の窓ガラスが殺されていた。

徹底的に、枠にへばりついた細かな破片を残して、窓という窓が「ことごとくぶち砕かれていた。

英介は、呆然と立ちつくした。ひしゃげたサッシから流れてくるそよ風が肌に突き刺さる。自分の部屋に毛虫が大量発生したような、救いようのない違和感。昨日まで普通に使っていた教室がこんなふうになるなんて。いつたいだれが。どうしてこんな真似を。

と、室内の様子を流し見た美弥が、犯人お前じゃねえの？ と英介が疑つてしまふほどに落ち着き払いつつ、状況分析を始めた。

「外から割られたんじゃないわね、ここ二階だし、真下の畑に足跡がついてないし。英介。周り、犯人たちがいるかも。よおく確認して

「犯人たち？ たち、つてなんだよ」

「割れる音は一回しかきこえなかつた。なのに、全部のガラスが割られてる。つまり、一斉に、同じタイミングで、全部のガラスが割られてるってことよ」

「あ……」

合点がいった。

これだけの窓をいつぺんに割るなんて、単独犯ではまず無理だ。ということは、何人がここに潜んでいる可能性があるのだ。

英介はまず、美術準備室をのぞいた。だれもいない。

机の下を調べる。いない。

カーテンの後ろ。でかい彫刻の陰。教卓の裏。いない、いない、

いない。

油断なくあたりを探したにもかかわらず、拍子抜けするくらいだ  
れも見つからなかつた。

部屋のど真ん中で、骨だけになつた窓から吹きこんでくる涼風に  
黒髪をさらしながら美弥がいう。

「まさか、外に飛び出しあつてことはないつてことはないでしょ  
うし……第一、なんだつてこんな、徹底的な割りかた……あ、ちょ  
うと英介！？」

美弥の声を置き去りにし、英介は走り出していた。  
予感がした。

いや。予感というよりは、確信に近い。

廊下をまっすぐ走り抜け、英介は掲示板をにらみつける。もうお  
なじみになつてしまつた、ポスター横の壁の落書き。

「なんだつてんだ……だれなんだよ」

こう書かれていた。

『やつた。英介くん、できたよ』

「えー、といつわけで、この？百鬼夜行絵巻？に出てくるお化けた  
ちは、みんな、元は人間に使われていた傘や草履、杖だつたんです。  
それが、長い年月を経て魂が宿り、こうして生きて動くようにな  
たわけですね。これを？つくもがみ？といいます。漢字で書くと、  
こうですね」

いい感じにぼけーっとした午後の授業、日本史。

趣味は盆栽、好物はアジの干物といった感じのおじさん先生が背  
伸びしながら黒板に『九十九神』と書きこんでゐるのを、英介は片肘  
をつきつつ、うとうとと見ている。

結局、美術室窓ガラス全壊事件は犯人不在のため迷宮入りとなり、  
当分のあいだ、美術室は出入り禁止になつた。学校中を騒がせたセ

ンセーショナルな事件も、一日もすればあつさりとみんなから見放されて「犯人？だれでもいいじゃんそんなの」という雰囲気になってしまった。実際、いまだに犯人の正体を気にかけているのは先生がたと英介と美弥、それに美術部と新聞部くらいのものだ。

あれ以来、ポスターに落書きはされてない。変な事件も起きてない。

しかし、犯人が見つかったわけでもない。

あの落書きからして、窓を割った犯人はポスター落書きの人物と同一犯という線が濃厚だ。というより、英介にはそつとしか考えられない。

どうすべきか英介には判然としないが、とにかくにも英介のポスターは今日で閲覧期間が終了。持ち帰りの許可がある。さっさと隠してしまえば、もうこれ以上へんなことは起こらないはずだ。根拠はないが、なんとなくそう思う。

やつた。英介くん。できたよ。

いま思い出しても氣味が悪い。犯人は、なんのつもりでみんな、「じゃあさー、せんせー、カラカラサオバケとかイッタンモメンなんていう妖怪も、その九十九神なわけ？」

と、教室後方からあがつた女子生徒の声に、峠先生が悠々と応じる。

「お、いいですねー。そうです。長いあいだ大切にされてきたものに魂が宿り持ち主に幸福を授けるという物語がこの時代の妖怪譚でちらほら見受けられます。すてきな話ですね。ちなみにこの話はテストに出ませーん」

なんだそりやー、という苦情がちらほらときこえたが、教室中に響く筆記音は小さくならない。

英介は、小さくあぐびをかみ殺した。

英介の席は窓際である。初秋、陽光うららかな午後。気温は適度に暖かく、お腹もほどよいっぽい。そして、峠先生ののつたりした授業。

正直、かなり眠かつた。いまにもまぶたが閉じそうだ。

「というわけで、みなさんも持ち物は大切にしてくださいね。大切に使っていると、ひょっとしたらあなたの所持品も恩返しをしてくれるかもしませんよ」

「でもさー。恩返ししてくれるの、九九年後じゃん。そのころ俺ら、もう死んでるつて」

「と思うでしょ？ ところが、身近なところに古いものがある」とは少なからずあるんですよ。たとえば先生の使ってるこの辞書。これは、私が祖父から譲り受けたものです。発行から九〇年も経過していますので、あと九年でこの辞書は命を授かるわけですね」

「ぽかぽか。うとうと。英介はすでに、夢の世界に片足を突つこんでいた。そのくせ、なぜか峰先生の声は頭のなかによく響く。すみません先生、がんばったんだけだめそうです。俺、寝ます。

「まあ、要するにですね。今日の授業のポイントは、ものを大切に使ってあげようという話でゲボッ」

えらく湿った音とともに、先生が咳きこんだ。

異様な気配に英介が目を覚まし、そして、のどを搔きむしるようになしてもがき苦しむ峰先生を見た。

「げこつ、ひじつ、え、ええええええつ」

体躯を折り曲げ、目をひん剥いて、よだれをたらしながら口を開閉させている。まるで死に物狂いでなにかを飲みこもうとするかのように。英介は、のどに餅が詰まった老人の姿を連想した。まさか、呼吸ができないのか。

クラス中、まず唖然となつた。おいおい先生大丈夫かよ、という空氣から、

な、なあちょっと、これまざいんじゃねえの？ と不安定な雰囲気へと様変わりしていき、

「おい、せんせ、先生つ！ やべえよ、これやべえつて！」 「いや、ちょ、な、だれか、どうにかしてよ…？」 「大丈夫先生、息、息して、ゆっくり吸つて！」

あつという間に收拾のつかないパーティクへと豹変した。

だれもが椅子から腰を浮かせた。先生に駆け寄る男子生徒もいたし、隣のクラスに助けを求めるにいこうとする女子生徒もいた。暴れる峠先生の手足を押さえようとする女子もいたし、ただおろおろと意味不明な声をあげるだけの男子もいた。

英介は立ちつくしながら、それらの騒動を呆然と眺めていた。まるで現実味がない状況だった。先生が苦しんでいるというのに、どういう行動をとるのが適切なのかを英介は知らない。下手を打つて先生の状態を悪化させたら取り返しがつかないので。この異常事態のなかで先陣を切つて「先生を押さえる、だれか他の先生を呼びにいってくれ」ときびきび指示を飛ばし、自ら人工呼吸を試みようとする学級長に若干の尊敬の念を覚えることくらいしかできなかつた。

やがて、教室を振るわせるほどの大好きな呼吸音。同時に「息、しだぞっ！」という男子生徒の叫び。

火のついたような喧騒が一瞬静まり、そしてだれかが、全力疾走した象のごとく荒々しく呼吸を続ける峠先生にきいた。

「先生、大丈夫ですか？」

「げほっ、はあ、わかつ、わかりません、息、息が、急に、はあ、止まつて、息が、吸えなくなつて、はあ」

どぎれどぎれながらも峠先生が言葉を発したことにより、教室中を取り巻いていた不穏な空気が多少なりとも払拭された。落ち着きを取り戻した女子生徒がおずおずと口を開く。

「……先生。保健室、いったほうがいいつて。なんかの発作かもしないじゃん」

「そ、そうですね。悪いけど、みなさん自習、していくください」

「先生、僕、肩、貸します」

保険係が名乗りをあげて峠先生を連れて廊下に消えていった。

先生のいなくなつた教室はすぐさま騒然となつた。クラスメイトたちはそれぞれ仲良しグループで固まり、峠先生の容態について意

見を飛ばしあつてゐる。

英介も自然と数人で固まつてゐる男子生徒たちの輪に加わり、

「あれ、平気かな」

「わからんねえけど、無事だといいな」

「先生、なにか持病あつたつけ」

「いや、きいたことねえ。人間ドックではなんの問題もなかつたつて、職員室で自慢してたけど」

「英介くん」

だれかに呼ばれ、反射的に英介は振り返つた。

クラスメイトの横山が英介の背後に棒のじとく突つ立つて「英介くん」と呼んでいる。

眉をひそめる英介。横山とは友達未満の関係で、間違つても下の名前で呼ばれるような仲はない。なぜ、英介くんなどと呼ぶのか。男子の輪も、不思議げにふたりの動向をうかがつてゐる。

「おう、どうした横山」

「英介くん」

横山はさつきと回じ言葉を、さつきと同じイントネーションで口にした。

「……なんだよ、なんか用か?」

「英介くん」

横山がまったく同じ言葉を、まったく同じイントネーションで口にした。

怪訝に思う英介。おかしい。横山の様子が、明確に変だ。手足を動かさず、関節も曲げず、身体測定中のマネキンのように微動だにせず口だけを動かしている。異様なのはなにより、その瞳。眠つている人間のまぶたを指で無理に開いたような、なにも見ていない眼。

「英介くん」

英介がはつとして振り向いた。

教室のすみから女子の声がした。田口。ろくに話したこともないのに、英介くんと呼んだ。横山と同じ人形の眼差し。

英介くん

今度は男子の輪のなかから声がした。藤堂。仲はいいが、彼は普段英介を苗字で呼ぶ。男子の輪がざわめき乱れ、様子のおかしい藤堂から一斉に距離をとった。藤堂はなおも柱のように佇立している。あさつての方角を見つめながらぶつぶつと呟くその様は、やはりマネキンとしか思えない。

「英介くん」 英介くん

富下が。北里が。あちらから声が。こちらから声が。

「英介くん」「英介くん」「英介くん」「英介くん」

彼らは針でとめられた蝶の「」とく微動だにせずに英

残りの半数はわざとを上回る異常事態にただ口をつぐみ、目を泳がせている。

お経のような抑揚のない声が教室を埋めつくしていく。

「英介くん」「英介くん」「英介くん」「英介くん」「英介くん」  
「えいすけくうん」「ええいすうけえくうん」「えええいいいす  
うつけええくうううううん」「うつけええくうううううん」

雪江せむれにかうへて、口の音に聞えていて、声を最後に、やがて、お経がぱつりと途絶えた。

と、操り糸が切れたかのように、マネキンたちが一斉に息を吹き返した。凍りついていた手足を動かし、大半のものが「あれ?」という表情で周囲を見渡した。なかには「でさー」となに」ともなかつたかのように友人に語りかける女子もいた。

介が震える声で問うた。

「な……なに。お前ら、なんの真似  
は……なにが?」

きょとんとする藤堂。英介が声を荒げる。

「いま、お前ら、みんなで、俺の名前、呼んだろ」「は？」

怒鳴りつけそうな英介をさえぎって、別の男子が代弁した。

「いや、いつてたろ。英介くん、英介くんつて。なんだつたんだよ、

いまの」

「なー、怖かつたよな。なんのいたずらだよ。趣味悪いよ」「え？」

「ちょっと待て。なんだそりや。……へ？ 僕も？ 僕もいつてたつて？ はあつ？ やめろよ、いつてねえよ」

「なにそれ。わけわからんない」

「いつてた……よな」

喧々諤々の水掛け論が始まつた。正氣だつた半数は「絶対にいつてた。お前らふざけんな」と相手をののしり、マネキンだつた半数は一様に「記憶はない。そつちこそ嘘をつくな」と反論した。そして訪れる、気持ちの悪い静寂。

ドアが開き嵐山先生が「授業中だぞ、静かにしろっ！」と怒鳴りこんで強引に事態を収めなければ、教室は再び混乱状態に陥つていたかもしれない。

クラス全員がしぶしぶ席につき、嵐山先生が教卓にたつた。毒煙が教室中に燻つているような、居心地の悪い空気。

嵐山のぐどい説教が轟々と吹き荒れるなかで、英介はうつむきがちに椅子に座り、栗肌をたてながら拳を震わせていた。

英介くん。また、英介くん、だ。

だれの仕業だ。なんでだ。なんで、俺なんだ。

もうたくさんだつた。気持ち悪い。はやく家に帰りたい。時間はなかなか進んでくれなかつた。

午後の授業終了のチャイムが鳴つた。

混乱渦巻く頭を抱えながら、ため息をつく英介。明日は、日曜日だ。事件の発端になつたポスターも持ち帰れるし、明日へりいはきつと穏やかに過ごせるだろう。たぶん。

ポスターは俺の部屋の壁に掛けておひづり。もう一度と妙なことが起じらないように願つて。

英介はかばんに荷物をまとめ、席を立つた。

### 03 口常食（後書き）

作者のたごらひろじと申します m( )m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ(・・)【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

スズメの鳴き声がきこえる。

カーテンの隙間からこぼれた白い光が、英介の部屋をぼんやりと照らしている。

ベッドのなかで目をこすりながら、制服姿の英介は大きく伸びをしつつ寝癖のついた頭をかき、ため息をついた。

昨日のことをぼんやりと思い出す。嵐先生が保健室に運ばれ、嵐山先生のお説教が炸裂した後、英介はまっすぐに家に帰った記憶がある。そして自室に到着するや、すぐさまポスターを木製の額にいれて自室の壁にかけ、そのまま服も着替えずに眠りこんでしまった。やはり一連の騒ぎのせいでの精神的に疲れていたのだろうか。

あぐび。今日は休日だ。英介の両親は早朝から旅行に出かけていて、家を自由に使える。

午前午後ともに英介は完全にフリーである。どうしよう。なにして過ごそう。今日くらい、いやなことはきれいに忘れて、一日を楽しむべきだろ？。まずは朝食を食べないと。

『英介くん』

枕に頭をあずけて呆けていた英介は、ふとだれかに呼ばれた気がして、ぼーっと部屋に目を泳がせた。

床に一面に敷かれた絵具まみれの新聞紙。机の上には整然と並べられた絵筆やらパレットやら。壁には英介の描いた様々な絵が展覧会のごとく陳列されている。壁際には愛用のイーゼルが立てかけられている。六畳ほどの部屋。英介の城。

鍵のかかった窓のカーテンを開き、ついでに目覚まし時計を確認する。九時一五分をすこし回ったところだった。

『英介くん。こっち。ここ』  
ぎょっとした。

たしかに、聞き覚えのない女の子の声が、室内からはつきりとき

こえたのだ。

たぶん、向こうの壁のほうからさじえた、ような気が……といつても壁には額に囲われたタヌキ顔の少女のポスターがかかっているだけで、絵の少女がこちらに手を振っていて……

英介は石化した。

ポスターの少女が、英介に、手を振っている。左右にぱたぱたと。『初めて、おしゃべり、できるね。うれしい』

ポスターの絵が、絵の少女の口元がゆっくりと弧を描き、鈴の鳴るような声を発した。

「…………。あー……ちょっと待て。ちょっと待てよ」

英介はひたに手を当てて顔を伏せ、そのまま十秒経過。ゆっくりと、顔をあげる。

ポスターの少女が、はにかむような微笑を浮かべている。昨日まではしかめっ面していたはずなのに……というか、ポーズそのものが変わっている。腰に手を当てて人差し指をびしりと天に指して、いない。祈りをささげる聖女のよつに胸の前で両手の指を組んでいる。

少女が、英介の瞳を見つめて、はつきりと口を開閉させて、うれしそうにいった。

『英介くん。私を産んでくれて、ありがと』  
ぎゅーっと目を開じる英介。

ゆっくりと開く。

ポスターの少女が、どうしたの、とうふうに小首をかしげた。英介がくわっと目を見開き「はー?」と叫んだ。

なんだこれは。

だれか絵をすり替えたのか。いや、といふかなんて絵が動いてるんだ。……つていうか、これ、現実か?

『ずっと、英介くんのこと、見てたんだよ。私を描いてくれてたときから、ずっと。一生懸命に私を描いてくれてる姿が、すごく、かつこよかつた……英介くん?』

?これは夢だ?という名の避難所に思考が緊急着陸しそうな風情の英介を見て、少女がくすりと微笑み、

『知ってる? ものには、魂が宿るんだよ』

押し黙つた英介の脳に、ふいに?九十九神?という単語が浮上した。

峰先生の日本史の授業でやつたような記憶がある。長いあいだ大切にされてきたものに魂が宿る、という現象。

百年前の絵の具を使い、美弥を想つて描きあげた、この世にふたつとないポスター。

……しかし。

そんな、バカな。

『私が最初に見たのは、英介くんが私を描いてくれている姿だった。始めは頭がぼーっとしててね、なにも考えられなかつた。でも、英介くんが私に一筆いってくれるたびに、だんだん意識がはつきりしていつたの。すごく真剣に、一筆一筆、命を削るみたいにして、大切に描いてくれてたよね。ずっと見てたよ。私を描きあがつたときの笑顔、よく覚えてる』

長いあいだ大切にされてきたものに魂が宿る。

ありえない。でも現に、ポスターの少女は、こうして口をきいている。

『英介くんとお話したかつた。しゃべれるようになるの、とっても苦労したんだよ。いろいろ練習したの。でも、どうしてもしゃべれなかつた。始めはね、ほんのちょっと文字を書くことしかできなかつたんだよ。がんばつて文字を覚えて、最初に?すき?つて自分の体に書いたの。そしたら英介くん、お返事をくれて、すごくうれしかつた』

こいつがいままで落書きをしていたのか、それじゃ犯人が見つからないわけだよな などと霞のかかった頭で考えながら、英介は改めてポスターの少女を凝視した。

少女の造形は変わっていない。彼女の面立ちも制服の色形も英介

が描いたそのままだ。だが英介はアニメや映画を描いたわけじゃない。少女の表情は実際に生きており、しゃべっており、体を動かすたびになだらかな肩にかつた茶髪がさらさらと揺れている。まるでアニメかCGでも観ているかのよう。

目覚まし時計が無表情に九時一〇分を刻んでいる。なぜかこの期に及んでようやく、ああこれは現実なんだな、という実感が英介に宿つた。

『でね』

少女は独白を続ける。

『文字を書くのに苦労してるうち、別の力が私に宿ったの。えっとね、物体を触らないで動かす力。これも最初はなかなかうまく使えなかつたんだ。重いものはびくともしなかつたから、ホコリを動かすことから練習を始めたの。それから木葉を落としたり、パレットの水をかき回したり。で、石膏像を動かせるようになつたとき、自分の力がどれくらいになつたか、チャレンジしてみたくなつたんだ。だから、だれもいなかつたし、場所も私から近かつたから、絵がたくさんある部屋のガラスを、いつぺんに割つてみたの。うまくいつたとき、私自身、すごく驚いた。たぶん、私の同種のなかでも、ここまでできるの、あんまりいないと思う』

得意げに語る少女を唖然と眺める英介。

見つかなかつた落書き犯人。一斉に割れた美術室のガラス。彼の脳内で、これまで発生していた諸々の事件がひとつ線でつながつていく。

『でね。ここまでやつて、これはひょつとしたら、人間も動かせるのかな、なんて思つて、あなたのそばにいたひとで試してみたの。最初は？英介くん？つてしまべらせるつもりだつたんだけど、うまくいかなくて、変にのどが絞まっちゃつて、倒れちゃつた』

「！……それ、その人間つて、まさか」

『うん。英介くんの教室にいた、おじちゃんの先生』

峰先生を呼吸困難の追いこんだのがこいつ。

わけがわからない。だれか説明してほしい。

ポスターの少女が説明する。

『そうやってね、いろいろ回り道して、それでやつと、こうして声ができるようになつたんだ。声をだすの、本当に難しかつた。お話ができるようになつて、うれしいよ』

美術室の窓ガラスをぶち割つた、峠先生を死なせかけた犯人をして、英介は微動だにできなかつた。

……こいつ、なんなんだ。

少女の真意がわからない。害意はなさそつだが、いつ機嫌を損ねるかわからない。窓ガラスをぶち破るほどの力。こいつはなにがしたいんだ。自分の一拳一動がそのまま死に結びついているような気がする。俺はどうすればいいんだ。

とりあえず、掠れた声で「よろしく」とだけ、いえた。

『うん。よろしく』

少女がはにかんだ。咲きたての花のような笑顔だった。  
と。部屋の外で、リズミカルに階段を上がつてくる気配がした。  
陽気で調子はずれな口笛までこえてくる。

英介がはつと顔をあげ、少女が眉をひそめた。

そして、やや強めのノックの音。

## 04 彼が生んだ犯人（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm( )m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ(・・)【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

「クツクツク。エイスケクン、アソビニキタヨ。ナカニイレテヨ」ロボットを模したおどけた口調で、美弥がドア越しに英介へ声をかけた。

彼女は英介の自室の前で仁王立ちしている。右手に小型のハンディ掃除機を、左手にゴミ袋を装備して。汚れてもかまわないよう、上下ともに色気もそつけもない青いジャージを着用している。

今日は彼のプライベートルームを強襲するつもりだ。今日こそはいくら英介が拒もうが、なにがなんでも部屋をきれいにしてやらねばならない。英介は放つておくと、絵の具の塊や紙の切れ端やらで部屋を埋めてしまうくらいにだらしがないのだ。いつだつたか、英介がパンの食べかすを床に放置していたため、油ギッシュな茶色い悪魔が彼の部屋に幾匹も発生してしまっていた。あのときは一週間ほど、美弥は英介の部屋に近寄らなかつた。そう、あの悪夢を再来させてはならない。絶対に。

「エイスケクーン。ハイルヨー」

ノックから七秒。これだけ待てば見られたくないものも隠せただろ。それくらいのデリカシーは美弥にある。

ゆっくりとノブを回した美弥は、ふと眉をひそめた。

ドアが開かない。

ちょこざいな。

「英介ー、あたしー、美弥ーつ。なんで鍵、かけんのよーつ」素の口調に戻りそこまでいつて、美弥は怪訝に思つた。英介の部屋に、鍵などついていたどうか？

ひどく慌てふためいた英介の気配がドア越しに伝わつてくる。ドアががたがたと揺れだした。ひょつとして、向こうからも開けようとしているのだろうか。

「い、いいところにきたつ。おい、きいてくれつ、犯人が、落書き

の犯人がわかつたつ。俺の描いたポスターが、ほら、例の『掃除強化習慣』のポスターが犯人だつたつ

「……なんすと?」

「俺が入魂しすぎたせいで、こいつ、本当に魂もつちまつた! や俺も信じらんねーけどさあ! 壁の落書きも、美術室の窓ガラスが割れたのも、全部、こいつが原因だった…………ああくそ、なんで開かないんだこのドア!」

こいつ絶対寝ぼけてる。

しかたない、ちゃんと田が覚めるまで掃除は勘弁してやろうと思  
い、

「あーあーわかった。じゃ、またくるから。それまでに田、ちゃんと  
と覚ましといよ。おじやましましたあ」

『美弥ちゃん、か』

という女の子の声が、英介の部屋のなかから、きこえた。  
美弥が訝しげな顔をして、再び部屋のドアをノックする。

「なに? だれかいんの?」

「いや、だからっ」

ピンポーン、と玄関のチャイムが鳴った。

ふん、と鼻を鳴らしてきびすを返す美弥。

「はーん。別にいいけどさー。あー、お客様みたいだから、あた  
しが出てくんねー。戻ってきたら、ドアの建てつけ、直すの手伝う  
わ」

「おい待つた待つた、警察に電話をつ」

英介の呼びかけをきれいに無視した美弥は、階段を軽快に駆けお  
りて玄関にたどり着き、「はいはーい」と返事をしつつ施錠された  
ドアの鍵コックに指をかけて、

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン  
ポン。

鍵を開けようとした美弥の指が固まった。

チャイムの乱打。常識的に許されない押しかただ。

「この場合、チャイムを鳴らす人間はふたつのタイプに分けられる」と美弥は考える。相手がよほどの常識知らずであるか、あるいは、いらっしゃっているか、だ。どちらにしろ、ろくな対応のとれる客ではないだろ？

美弥は迷う。本来ならインターフォンで応対すべき状況なのだが、あいにく築一〇年のこの家にそんなものはない。

「どちらさまですか」

やむなくドア越しに誰何するも、返事がない。

念のためにドアチャーンをかけて、鍵を開けたとたんに、外側からチャーンが干切れそうな勢いでドアが引っ張られた。凄まじい音をたててチャーンが限界まで伸びる。

驚きのあまり本気で腰を抜かしそうになつた美弥の眼前で口を開けた一〇センチほどのドアの隙間から浅黒い手が突っこまれた。自動車のワイパーのように太い腕がばたばたと振られ、さらに、隙間から腕の主が顔を覗かせた。見たことのない禿頭の中年男性。白目をむき、まぶたを痙攣させて、なにごとかをぶつぶつとつぶやいている。酔っ払いか、異常者か、あるいは麻薬中毒者か。

美弥は死に物狂いでドアノブを握りしめ内側に引っ張つた。男性の腕がつつかえ棒になり閉まらない。一度、三度と叩きつけるようにドアを引っ張り、埒があかず思い余つた美弥は床に置いていたハンディ掃除機を引っかんで振りかぶり、差しこまれた腕を力任せにぶつ叩いた。痛みに耐えかねたのか、男のおぞましい腕がぬつと引っこめられた。即座に美弥はドアをぶち閉め、鍵をおろし……そして、その場にへたりこんだ。ここを開ける。そう叫ぶかのように、ダンダン、ダンダンダン、と立て続けに玄関の扉が叩かれる。

……なんだ。なんだというんだ。

言葉もなく呆然としていたのは数秒だけだった。はつとした美弥はすぐに立ちあがり、居間へと駆けだした。ひょっとしたらあのオヤジ、庭のほうに回りこんでくるかもしれない。居間は庭に面しており、縁側の窓に鍵がかかっていなければ容易に屋内へ侵入さ

れてしまう。窓が施錠されているか、確認しなければ。

美弥は大急ぎでリビングに駆けこみ、そして、最悪の光景に自分の目を疑つた。

リビング窓の鍵はかかつていたため、何者も室内に入りこんではない。だが、最悪だつた。

居間から見渡せるさして広くない庭にふたりの人間がいた。さつきのオヤジじゃない。いずれも美弥の知らない人物で、かたや工事用のヘルメットをつけた作業着の若者、もう一方はスーツを着た若い女性だ。それが、まるで重力がこちら側にあるかのように、窓にびたつとナメクジの「」とくへばりついている。窓に密着した男性のほほがぎゅぎゅぎゅと音をたてて下へ滑り落ちていく。女性にいたつては齧りつかんがごとく窓に顔を接触させているため、泡まみれの口内が丸見えだ。彼らは、家のなかに入ろうとしているのか。身の毛がよだつ、という言葉の意味を、美弥は初めて体感した。やばい。なんだか知らないが、やばいことになつてる。

警察に電話を、という英介の叫びが脳裏によみがえった。

美弥は逃げるよつにリビングを抜け、玄関の電話機まで駆け寄つた。玄関ドアはいまだに外からがたがたと揺さぶられている。

一一〇番を押した。永遠にも思えるホール音が一回鳴り、がちゃりといつ受話器のとられる気配、

「秋月警察署です」

「家が変なひとたちに襲われてますつ、すぐに助けにきてください、住所は中丸 丁目の」

居間の方からガラスの砕けるけたたましい音、

「 番の ですつ、名前は橋川です、早く助けにきてつ」

受話器を切らずに電話機の横におき、美弥はハンディ掃除機を片手に喧騒の居間へと駆けこんだ。

状況はより最悪になつていた。窓ガラスが床に派手に飛び散つてゐる。窓に寄りかかっていた闖入者たちの体重を支えきれず、サッシ戸そのものがはずれてしまつたのだ。

ぱつかりと口を開けた真四角の空間から、若者と女性が土足のまま、いままさに侵入しようとしていた。

美弥は努めて全身の震えを抑えつつ、腹に力をこめ、優位を装つて彼らへ宣告した。

「出てつてください。警察呼びましたよ、早く逃げないと捕まりますよ」

完璧に馬耳東風だつた。おぼつかない足取りでスーツの女性が、次いで作業着の若者が居間に足を踏み入れてきた。その背後でまたひとり、瞳の焦点の合わない主婦風のおばさんが庭にのつそりと侵入していた。だらしなく開かれた口からよだれが滴り落ちている。この世の終わりがきたのかと、美弥は一瞬、本気で錯覚した。いつかに英介と一緒に観たゾンビ映画を思い出す。街中に蔓延したゾンビウイルスが原因で人間が生ける屍になつて、未感染の人々を襲いまくるB級ホラー映画。あの状況とそっくりだ。

どうしよう。どうすればいい。落ち着け。警察に電話が繋がつたじゃないか。警察が到着するまで安全なところに隠れていればいい。美弥は自分を鼓舞した。

ともかく、この家にいるのは危なさそうだ。どうにか外へ逃げられないか……と、そこまで考えた美弥の顔から血の気が引いた。屋外への脱出口がないのだ。

玄関はオヤジゾンビが居座つているし、居間はこいつらに占拠されつつある。こいつらの隙間をぬつて脱出するのは危険すぎる。ひとが通行可能な出口はこの二箇所だけ。ほかに、逃げ道はない。それに、二階にはまだ、事情を知らない英介がいる。

慄然とした。

二階に、英介がいるのだ。

そうだ。さつき英介、部屋のドアが開かないといつていたじゃないか。彼には元より逃げ場がなかつたのだ。もしこいつらが二階に上がつたら、英介になにをするか、わかつたもんじやない。とすれば、こいつらをここで食い止めるしかないじゃないか。：

…絶対に、こいつらを、一階にあげるわけにはいかない。

美弥は右手に携えるハンディ掃除機の重さを意識した。ゆっくりと息を吸い、不法侵入者たちへ向かつて腹の底から声を出す。

「出でいいて」

ゾンビの若者が、棒のような右腕をゆらりと美弥へ差し出してきた。

もはや問答無用だつた。

生理的嫌悪感をかきたてる彼らの愚鈍な動きの隙をつき、美弥はハンド掃除機を両手で水平に構え、怒声一喝、全体重を乗せて前へ突き出した。若者の胸元に直撃、彼は冗談みたいにあっけなく転倒した。仰向けに寝そべり、裏返ったカメのごとく手足をばたつかせるも、なかなか起きあがれない。

女性がそこまで接近していた。美弥は反射的に掃除機をぶん回した。てっきり避けられるか受けとめられるかと美弥自身も思っていたその咄嗟の一撃はゾンビ女性の腹部へ見事にきまり、ただそれだけで彼女はバランスを崩し、真横に横転した。

こいつらたいしたことない、と美弥は確信した。動作が緩慢だし、それにどつやうじうらの攻撃を避けるだけの理性すらをも失っているらしい。

いける、と思う反面、冷や汗が背中を伝づ。庭に新手が、二名も入りこんできている。野球のユニフォームを着た男子中学生がふたり。

美弥は可能なかぎり大声をあげた。助けて、だれか助けて、と。それは恐怖から出たものではなく、冷静な判断による救助要請だった。とにかくだれかに危機を知らせようと思ったのだ。だれでもいい、近所のひとに、助けを。

美弥は狭い居間の開かれた窓へ向け、ありつたけの声で助けを呼び続ける。

英介の家、半径およそ五〇メートルに近づく人間すべてが正気を失うことも知らずに。

## 05 聞入者たち（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm( )m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ(・・)【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

「なんでも、ドアが、開かないんだよ、このへ」

英介の部屋。

びくともしないドアに悪態をついた英介が、階下での狂騒もつゆ知らず、ポスターの少女へと慎重に問つた。

「おい、これ、お前がやつてんのか？　俺をどうするつもりだよ。ここに、閉じこめるつもりか」

『へ？』

少女は純粹な驚きを顔中で示した。そしてすぐに英介の意を飲みこめたらしく『うつん、違う、違うよ、閉じこめるなんて』と心外そうに否定した。

「だったら、ドアを開けてくれよ。俺を、ここから解放してくれねえ？」

恐る恐るといったふうな英介の問いかけに対し、少女がほがらかに答える。

『もちろん。あ、でもその前に、私のお願ひ、きいてくれたら、うれしいな』

『お願い……？　なんだ、お願いって』

どんな無理難題を押しつけられるかと、英介は身を硬くした。英介くんの脳みそが食べたいとか、美弥ちゃんの命がほしいとか。

しかし、少女の要望は、

『英介くんのそばにいたいの』

きくかぎり、いたつて素朴でひかえめなものだった。

『私、英介くんのこと、好きなの。だから、一緒にいたいの』

『一緒にいたいって……えつと、どういう意味で？』

死ぬまで。絶対に部屋から出してあげない。死体になつても愛してあげる。

英介の物騒な予測とは裏腹に少女は人差し指を唇に当てつつ、の

んきに『』いう。

『どうつて……んー、英介くんが絵を描くのをぼーっと眺めてたり、  
おはよう?とか?おやすみ?とかいつたり、今日学校でこんなこ  
とがあつたとかおしゃべりしたり、かな』

「…………は? それ、だけ? なんかもつと、他に、ねえの  
?』

『う、うん。なくはないよ』

少女の声色に若干の照れが混じる。

『できればね、デートしたいの。一緒にどこかに遊びにいきたい。  
海とか、公園とか、映画とか。無理なら、やっぱりお家のなかで、  
英介くんが絵を描くのを、見ていたいな。それからね……キスも、  
したいな、なんて』

最後は、消えてなくなりそうなほどに小さな声だった。

裏表のない、下心をうかがわせない少女の真摯な口調に、英介は  
拍子抜けすらした。なんだかごく普通の、年頃の女の子と会話して  
いるような気さえしてくる。

「…………あー、なんだ……つまり、俺に、お前の彼氏になれつつうの  
か?』

『んー。ちょっと違うの』

英介の確認に、少女は四角い縁のなかで、ふるふると首を振った。

『私と、兄妹になつて』

まったく想定外な少女のお願いに、英介の心が活動を止めた。

この世のほとんどを知らない澄んだ瞳で、少女が『』

『学校の図書室で、いろんな本を読んで勉強したの。それで、わか  
つたの。恋人つて、結局、他人でしょ。いつか別れるの。でもね、  
兄妹なら、いつまでも一緒にいられるんだよ。恋人より、兄妹のほ  
うが上なの。だから、英介くんと、兄妹になりたいな…………英介  
くん? きいてる?』

呆然と少女の持論をきいていた英介が、

「…………。はつ

突如、笑い始めた。ひとしきり乾いた笑い声をあげたあと、蠅人形のような声で、英介がいった。

「なに妙な勘違いしてんだよ、お前」

きょとんとする少女の幼子のような瞳を見つめ、英介が問うた。  
「兄妹で、恋愛はできない」

『…………？』

「お前、俺のこと、好きなんだろ？」

『うん、好き』

「キスしたいんだろ」

『う、うん』

「だつたら、兄妹にならうなんて、バカだよ」

大きく息を吸い、

「兄妹で恋愛はできないんだよ。法律で決められてるんだよ。キスもできねえ。好きだつて想いを伝えることさせ、許されねえんだよ。他人のほうがまだいいよ。そんなことも知らなかつたのか。いろんな本、読んだんじやなかつたのかよ」

疲れきつた声で英介はすべてを吐き出した。

暴言じみた英介の言葉もどこ吹く風、少女はマイペースに次善の案を提示した。

『じゃあ、恋人。私たち、彼氏彼女になりたい』

『……それも、勘弁してくれねえか？』

『なんで？…………美弥ちゃんがいるから？』

『…………。友達じや、ダメか』

『友達』

少女の瞳が、悲しみに曇つた。

『それって、私のこと、嫌いってこと？　本に書いてあつたよ、お友達でいましょうつていうのは、そのひとのこと、好きじゃないってことだつて』

『違う。お前、どんな本を読んで勉強したんだ』

とぼけた少女の言い分に英介は苦笑を漏らした。こんな状況で笑

える自分はどうかしていると思う。

失意に沈んだ声で、少女がなおも食いさがつてきた。

『お願い。私を、彼女にして。私の、彼氏になつて。英介くんとつきあいたい。恋人は別に、美弥ちゃんじやなくともいいでしょ？』  
「は。そうだな。そのとおりだよ。でも……。悪い、やっぱ、無理だ』

意氣消沈のまま、英介は自暴自棄気味に言葉を続けた。少女が寂しげに顔を伏せた。室内を薄く照らし出す朝日。窓外のスズメの鳴き声は、いつしかきこえなくなつていた。

不意に英介は少女の力を思い出した。峠先生を操ろうとして呼吸困難に陥れた、あの力。なぜだろう。不思議と少女に対する恐怖は薄れていた。

自嘲を孕んだ英介の声が室内に響く。

「どうする？ 力ずくで、俺にいうことをきかせるか？ 峠先生みたいに」

『し、しない。やらないよ。……それに多分、無理だと思う。英介くん、私を生んでくれたひとだから、力、効かないんじゃないかな』  
「ふん。……なあ。峠先生の事件のあと、クラスの連中に英介くん、英介くんってしゃべらせたの、お前だよな。なんのつもりだつたんだ、あれ』

うつむきがちの英介が、続けざまに質問した。

『うん。あれ、失敗なの』

「失敗？」

『ひとつを動かす力にまだ、慣れてなくつて。だから、訓練したの。あーあーつて声を出すところから始めて、それからなにかしゃべらせようと思って、真っ先に思いついたのが英介くんの名前だつたの。でね、何人かに英介くんつて声を出させてたら、途中で力が尽きちゃつて、変な声になっちゃつたの。でも、もう失敗しないよ。ちゃんと力を使いこなせるようになったから。あ、そうだ』

それからふと思いついたように、少女が話を切り替えた。

『それとね、もうひとつ、謝らなくっちゃいけないこと、あるんだ。いつだつたかな。私が壁いっぱいに『ごめんなさい』とか？きらわないで？って書いたときのこと』

「あ……ああ、あの、怪しこことがびしーっと書いてあつたやつ、か？」

『あの『ひる』、まだよく言葉を知らなかつたの。どんな言葉を書けば英介くんが許してくれるのか、わからなくつて。とりあえず、思いつくものを色々書いてみて、それから必要なものだけ選んだら、あとは全部消そうと思つてたの。でも、消す前に、英介くんがきちゃつて。すごく変な顔してたから、ああ、これは書いちゃいけないことだつたのかなーつてわかつて。でも、英介くんの目の前で文字を消すのも変だから、そのままにしておくしかなかつたの。だから、ごめんね』

悪びれたように頭をさげる少女を前にして、英介はよつやく、彼女の本性に思い至つた。

『これは……ここは……本当の本当に、『じく』普通の女の子なんじや、ないか？

サイゴジみた落書きとか、峠先生の呼吸困難とか、俺を想う気持ちがたまたま最悪の形で俺に伝わつていただけで……こいつは普通の、世間知らずの小さな女の子じやないのか？

そこまで考えて、英介は合点がついた。

そうだ。こいつは生まれてから、一ヶ月程度しか経つてない。彼女はまだ、未成熟の子供なんだ。それも幼稚園とか、小学校低学年くらいの。

彼女の？好き？は、たとえば髪を振り乱した白装束の電波女が包丁片手に「愛してるつていつてええ」とかいつた類のものではなく、むしろ、幼稚園児が保育士に不細工な手作り指輪を渡しながら「大きくなつたら結婚してくらさい」とか、そういう淡い次元の？好き？なんだろう。きっと。

そう思つと、なんだか妙な気分になつてきた。

さっきまでの緊迫感は鳴りを潜め、代わりに微妙な照れくさが英介の心に滲み出てきた。

……と同時に、英介には本格的にわからなくなってきた。『いつは俺に害をなさない。』とすると、『いつを怖がる具体的理由がどこにあるのだろう。』考えてみれば、自分で作った、自分が生み出した作品を怖がること 자체、なんか間違つてないか。

「あー……えーとだな。うん」

英介はせきばらいをひとつ。安全への打算や保身などではない、いわば他念のない？親心？から、少女に語りかけた。

「……わかった。友達だったら、いいぜ。恋人はちょっと難しいかもしれないけど。でも、お前のこと、大事にするよ。俺の作品だもんな」

少女が顔をあげた。その幼げな面立ちが徐々に嬉しそうな微笑に彩られていく。うつすらと涙すら浮かんでいるようだった。優しい雨にうたれた虹のような表情。

こんな得体の知れない九十九神の少女と友達になる。それでいいんだろうか。

それでいいんだ。英介はいつしか、自然と納得していた。

俺は、こいつの、作者だ。

俺に拒絕されたらこいつには居場所がなくなってしまう。それは可哀想だ。俺だけでも、こいつを受け入れてやらなきゃならない。

俺はこいつの作者で、友達で、親なんだから。

肝が据わった。英介は物怖じせず、友人と接するように少女に告げた。

「なあ、とりあえず、ドア、開くようにしてくれないか？ 閉じこめられてるみたいで息苦しくってぞ」

英介の提案を少女は至極あつさり了承した。くすりと微笑みながら、  
『うん、わかった。でも、もうちょっとだけ待つて。もう少ししたら』

「あ？ ああ、ま、開けてくれるんならいいけど」

そういうながら英介はそつと時計を確認しつつ、ドアに手をやつた。美弥が階下へ降りてから、ゆうに一〇分が経過している。ちょっと遅すぎやしないか。客の応対が終わったら戻つてくるといつていたのに。

と、そんな彼のそわそわした様子を見て、少女が笑みを浮かべつつ、目を細めた。

獲物をつけ狙う子猫の瞳だった。

もうちょっとだけ待つて。もう少ししたら、いやなひとがいるくなるから。

## 06 真相（後書き）

作者のたこらひろしと申します m( )m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ(・・)【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2429z/>

---

【ラノベホラー】彼のポスター

2011年12月20日22時50分発行